



	INF	REF	こども	電話	メール	中央計	行徳	BM	南行	信篤	平田	駅南	全館計
4月	609	411	449	5	8	1,482	1,551	67	240	118	135	585	4,178
累計	609	411	449	5	8	1,482	1,551	67	240	118	135	585	4,178

INF:インフォメーション・カウンタ REF:レファレンス・カウンタ BM:自動車図書館

この度、参考業務事例集のタイトル「新・参考業務月報」を改め、「あれこれふあ」にリニューアルしました。これからも、日々の疑問の解決にお役立てください。

📄 今月のレファレンス記録票から

分類	質問と内容
----	-------

- 293.5 ブイヤベースについて、①マルセイユの郷土料理であるブイヤベースについて定めた「ブイヤベース憲章」についての中身、成立の背景、②ブイヤベースという料理そのものの背景、歴史的経緯などが知りたい。

①「ブイヤベース憲章」の中身、成立の背景については、『フランス文化事典』（田村毅／[ほか]編 丸善出版 2012）p.148 ブイヤベースの項に、「ブイヤベースの伝統の味を守るため、レストラン経営者たちによって1980年に「ブイヤベース憲章」が制定され、その中で材料やレシピ、提供方法が細かく規定されている。それによると、ブイヤベースの具材となるのは、カサゴ、アンコウ、ホウボウなど、憲章に列挙されている魚のうち4種類以上と、じゃがいもである。好みに伊勢エビやシャコを入れる場合もある。またスープは小さな岩礁魚を1時間ほど煮込んでだしを取り、塩、コショウ、サフラン、フェネルなどの調味料で味付けする。成功の秘訣は、魚の新鮮さと多様な魚の混ざり合った風味である。通常はスープと具材が別々に提供され、魚は必ず客の前で切り分けられる。ルイユソース（唐辛子入り辛口ソース）かアイオリソース（ニンニク入りマヨネーズソース）、クルトンとともに食する」という記載がある。

②ブイヤベースという料理そのものの背景、歴史的経緯については、同じく上記資料 p.148 に以下のような記述が確認できる。

「ブイヤベースは地中海沿岸の都市マルセイユの郷土料理である。紀元前7世紀頃、ギリシャの植民市マッサリア(後のマルセイユ)で、漁師が売れない魚を煮込んで食べたカカヴィアという料理が起源とされる。元来質素な家庭料理だったものが、時代を経て素材にこだわるようになり、次第にブルジョワ料理へと変化を遂げた。それが「マルセイユのブイヤベース」である。」

また、『フランス食の事典』（日仏料理協会／編 白水社 2007）p.530-531 ブイヤベースの項に、「マルセイユの、スープ仕立ての魚料理。アルキメデスやピタゴラスも好んだ古代ギリシアからの魚のスープが発展したもの。19世紀、文学作品に多く登場したために有名になった。」とある。

さらに、『世界たべもの起源事典』（岡田哲／編 東京堂出版 2005）p.332-333 ブイヤベースの項に、料理の由来についての諸説の記述がある。

- 386.1 賀茂神社の斎王について、①斎王が廃絶した当時の時代背景、②葵祭の中断のきっかけと復興の経緯、復興後の変化などが知りたい。

斎王とは、『平凡社大百科事典 6』（平凡社 1985）p.7「斎院」の項に「賀茂神社に奉仕する未婚の皇女もしくは王女。斎王、賀茂斎院ともいう。伊勢神宮の斎宮にならって設置された。」とある。

①斎王が廃絶した当時の時代背景について、『日本女性人名辞典』（日本図書センター 1993）p.327「嘉陽門院」の項より、「後鳥羽天皇の第二皇女。名は礼子。元久元年（1204）内親王の宣下を受けて賀茂斎院となり、（中略）建暦二年（1212）病のため斎院を退下。」との記載がある。

『葵祭(賀茂祭)』（京都書院 1991）p.118には、「斎王は平安初期の有智子内親王から鎌倉初期の礼子内親王（後鳥羽院皇女）まで四百年近く続いたが、承久の乱後に途絶えてしまい（後略）」とある。

承久の乱後の世相について書かれたものとして、『斎王』（津田由伎子／著 学生社 1980）p.190「18.終章」に、「天慶の乱、保元平治の乱、承久の乱、蒙古来襲と、国の大異変がひきつづき、（中略）不穏な社会相となった。承久の乱後は、武家の圧力もいっそう強くなり、朝廷の権威は衰退しながらも、なおその対立はきわめて根強いものがあった。」と記載されている。

②葵祭の中断のきっかけについて、『年中行事大辞典』（加藤友康／[ほか]編 吉川弘文館 2009）p.205に「王朝の衰退とともに祭りも衰退し、応仁の乱で文亀二年（1502）から元禄七年（1694）まで、朝廷の祭りとしての賀茂祭は中絶した。」とある。

復興の経緯については、『葵祭(賀茂祭)』（京都書院 1991）p.117に「ようやく再興されたのは（中略）元禄七年（1694）霊元上皇らの非常な努力によって大嘗祭の復興された東山天皇朝のことである。その再興に尽力したのは、下鴨神社祠官の鴨（梨木）祐之や上賀茂神社祠官の賀茂（梅辻）職久などであった。」との記載がある。

復興後の変化についても、同著 p.118に「戦後復興された葵祭行列を盛り上げるため、本列の後に新しく「斎王代」以下の「女人列」を加えたのである。」との記述が確認できる。

653.2 アフリカに自生している植物バオバブが、先住民にとって植物信仰の対象になっているという話を聞いた。どのような木として信仰されていたかなどが知りたい。

『心に響く樹々の物語』（ダイアン・クック他／写真・文 日経ナショナルジオグラフィック社 2017）p.62に、「キンバリー地方の先住民アボリジニにとって、バオバブは並外れて貴重な存在だった。精神面では、力強い精霊の宿る場所として人々の心の支えとなり、実用面では、乾季の豊かな水源として命を支える。」との記述がある。

『木々の恵み』（フレッド・ハーゲネーダー／著 毎日新聞社 2009）p.22には、「この木は貴重な水資源になることから、部族の人々にとってはまさに「命の木」であり、それにふさわしい尊敬と感謝の念を表す習慣や儀式は有史以前にまでさかのぼることができます。さらに、いくつかの国では部族の重要な人物（中略）が死んだ時の埋葬の儀式で、水源として使われなくなったバオバブの、割れて空洞になった内部に死体を安置する風習があります。これは、彼らにとってバオバブの木は死者の魂が霊界に向けて旅立つ時に通る門と考えられているため」とある。

『世界の巨樹・古木』（ジュリアン・ハイト／著 原書房 2016）p.224においては、「アフリカでは、バオバブは昔から宗教的に重要な木で、古いバオバブには大いなる精神が宿ると信じられていた。少年がバオバブの樹皮に含まれる水で沐浴すれば、この木のように大きく強い大人になれると言いつた。バオバブは力、知恵、健康、そして長寿のシンボルなのである。」との記述が確認できる。

984 ニコライ・A・バイコフの「満州の密林にて」、「満州の虎」、「極東の熊」が読みたい。

蔵書検索をしたところヒットしなかったため、中央図書館所蔵の『バイコフの森 北満洲の密林物語』（ニコライ・A・バイコフ／原作 中田甫／訳 集英社 1995）を確認したところ、p.348に著作一覧として、「単行本『満州の密林にて』（1934年 ハルビン）、冊子『満州の虎』（1925年 ハルビン）、冊子『極東の熊』（1928年 ハルビン）」との記述があった。

さらに、p.349より『満州の密林にて』については、邦訳として『北満の樹海と生物』（大阪屋号書店 1942年）、『密林物語』（小壺天書房 1960 番町書房 1972）が出版されていることが分かり、『密林物語』（番町書房 1972）は、船橋市北図書館での所蔵が確認できた。